John Israel

Lianda: A Chinese University in War and Revolution.

Stanford：Stanford University Press, 1998, xv＋460pp.

三好　章

I

「キューバの侵略者が合衆国の東海岸を占領し，連邦政府がデンヴァーに遷り，ハーヴァード，イェールそしてスウォースモアの学生や教授たちが，戦争の間，ニューメキシコのアルバカーキに移転した」（p.ix）との，やや突拍子もないアナロジカルな書き出しで，本書は始まる。

日中戦争の間，国立の北京大学と清華大学，および天津にあった私立の南開大学が，戦火を避けて研究と教育とを維持するため，初めは湖南省長沙に，ついで雲南省昆明に合同移転を行い，最終的に国立西南聯合大学（以下「聯大」＝Lianda）と称したことはひろく知られている。これは，当時の中国で学術教育両面で最も名門と見なされ，国際的にも高い評価を得ていた3大学が，本来の所在地を離れて合同し，共同で大学運営を行ったものである。これをアメリカにたとえれば，引用した冒頭部分のようになるのであろう。まさしく，歴史的異常事態の中での出来事であった。

イズラエル（Israel）は，この聯大の成立および昆明への移転の過程から，戦後の北京および天津への帰還開始までの時期，すなわち聯大の全史を扱い，クロニクルな整理とその間の学術研究の状況や学生運動，なにより聯大に結集した知識人の動向と政治状況の関わり，また中央と地方の関係でもある重慶と雲南との関係に注意深く目を配っている。そしてこのことが，人民共和国史をも視野に収めた全体史（ここでは，黄仁宇の Macro History の意味，すなわちひとつの歴史全体を連続性の中に包含して考察する視角の意味で用いている）の観点を保証している。

II

本書は大きく序文と4部16章，および結論からなり，その中にさらに目次にはあげられていないが，細かく節立てがしてある。以下，目次をしめす。

はじめに
第1部　愛国者の巡礼
　第1章　北平から長沙へ
　第2章　聯大の長征
　第3章　蒙自の魅力
第2部　交流
　第4章　聯大と雲南の人々
　第5章　重慶と昆明
　第6章　聯大のエートス
第3部　教授たちの誇り
　第7章　文学院
　第8章　社会科学院（法商学院）
　第9章　戦争と学問
　第10章　自然科学院（理学院）
　第11章　工学院
　第12章　師範学院
第4部　聯大の8年
　第13章　希望の年月：1938～41
　第14章　忍耐の年月：1941～43
　第15章　試練の年月：1943～45
　第16章　委任統治の完了：1945～46
結　論

目次にしたがって，本書の概要を紹介しよう。

まず，第1部では日中戦争の全面化にともない，高等教育機関が中央研究院などの研究機関とともに後方に移動する過程が整理される。1937年8月，教育部の指示によって北京大学，清華大学，南開大学が国立私立の枠を越えて連合し，まず長沙に移動し

て国立長沙臨時大学を設置した。しかし，そこへも戦火がおよび，翌年5月には昆明に移動して聯大と名称を変更する。移転に際して，湖南省長張自忠が，長沙臨時大学の学生教職員ともども昆明行きを当初は渋ったものの，教育部長であった陳誠の説得でそれを了解し，最終的には部下の黄師嶽を先導役として中文系教授であり詩人としても著名であった聞一多などの陸路移動組につけ，昆明まで引率させている（pp.30-32）。移動は，その他に，カルスト台地をバスで移動した哲学系教授であり文学院院長であった馮友蘭たちのグループ，また一度香港からハイフォンに船でわたり，ハノイから列車で昆明に向かった英語学教授陳福田らのグループの3コースに分けて行われた。途中，陸路の「長征」組は1930年代後半の当時においてさえ四書五経を講じる小学校や（p.45），おおっぴらに売られているアヘンなど（p.46），を目撃した。

第2部にはいる前に，10葉の写真が掲載され，「長征」の状況をうかがうことができる。第2部では，第4章で雲南省長龍雲が，自分の優位を確保する意味もあって聯大を受け入れたこと，それが蔣介石との一定の矛盾の上にあったことが述べられる（pp.83，90-94）。龍雲は，汪兆銘がこののち重慶を脱出してハノイに向かう時，同調を期待される人物でもあり，ナショナリズムや民主主義という思想性からではなく，みずからの勢力を維持することが行動の基本であった。また，一般の雲南の人々にとって聯大の学生教員は，中国の他の地域同様，雲の上の人々であったし（p.84），新参者に対しては敵意さえしめしたのである（p.88）。いっぽう，聯大の学生教員は，雲南では客へのもてなしにアヘンが出されることに驚きを隠さなかった（p.87）。この両者の矛盾は，伝統中国一般の士大夫と農民の関係の継続であり，そこに西欧化された知識と雰囲気とを持ち込んだ場合におきる，一般的な状況であったといえるであろう。第5章では重慶に遷都した国民政府の戦時教育政策が整理される。全国的には三民主義青年団が1938年7月に発足し，講義の中に三民主義を必修とするように圧力が加えられるなど，イデオロギー統制が強化されて学問研究の自由も脅かされるようになるが，社会学系教授潘光旦や『今日評論』の編集者であった政治学系教授錢端陞ら聯大リベラリズムの担い手たちが，これらに対して寛容と懐疑の姿勢を掲げて対峙した様子が述べられる（pp.98-105）。また，学生たちへの軍事教練も，必ずしも順調には進まなかった（pp.105-107）。しかしながら，聯大は統一戦線のシンボルとなってはいたものの，重慶からの財政支援は充分なものではなかった（pp.116-117）。第6章では，まず聯大に参加した北京大学，清華大学，南開大学のそれぞれの歴史が手際よく整理される（pp.118-123）。さらに，聯大以前に3大学が人事も含めて関係が深かった上に，「清華は真摯，北大は自由，南開は闊達」という各大学の特徴が統合されて「清華と南開の厳格な教授精神を北大の自由な研究精神の伝統に加味し」，経済学者の戴世光によれば聯大のエートスとは「学部運営，学問的基礎，科学と民主主義として集約され，充実した仕事に力点が置かれる」ことと述べている（p.124）。要するに，聯大のエートスとは「五四」以来のアカデミズムに裏打ちされたリベラリズムなのである。

第3部にはいる前に，こんどは16葉の写真が掲載されるが，その中には聯大の教員の集合写真や学生の受験票，さらに本書のカバーにも使われた聯大校門などが含まれている。戦争という異常事態での学問のあり方を述べた第9章を除いては，第3部では聯大各学部ごとの教員が，戦時の中でも以前同様に継続した研究の状況を中心に紹介される。なお，第9章では学問的業績として，哲学心理学系教授金岳霖の『論道』，哲学心理学系教授湯用彤の『漢魏両晋南北朝仏教史』などのほか，馮友蘭が編集した『哲学評論』，さらに昆明近郊の農村調査の機会を得た費孝通や潘光旦などがあげられているが（pp.196-198），経済史や経済理論の分野では，日本軍の爆撃で多くの文献資料を失ったため，研究の進展が困難に陥らざるを得なかった（pp.200-201）。それでも，この時期に『今日評論』，『新動向』，『戦国策』，『民主評論』などの雑誌，『観察報』，『生活導報』などの新聞が発行され（p.201），これらは民主主義に関する議論の場となっただけでなく，戦時の

昆明の文化界に大きな影響を与えた。

第4部の前には，13葉の写真が掲載され，そこには民主化要求のデモや「一二一運動」の犠牲者追悼会の模様，生前の聞一多と現在の金岳霖のポートレート，聯大紀念碑，1985年の「一二一運動」40周年記念パレードをする少年先鋒隊などが紹介されている。第4部では時系列に沿って，聯大の全史が語られる。第13章では「希望の年月」と題して，1938～41年，すなわち皖南事変によって事実上崩壊する抗日民族統一戦線が，それなりに実質を伴って維持されていた時期にあたる。そこでは，ヴィヴィアン＝リーなどが出演したアメリカ映画だけでなく，エイゼンシュタインのソ連映画も人気を博し，映画「大円舞曲」によって「美しく青きドナウ」のメロディーが，聯大の人々に口ずさまれ，左派からの視点ではこの時期が課外活動が最も生き生きとしていたという（p.257）。それは壁新聞による学生の言論活動のピークが，1941年1月，北方へ移動中の新四軍が国民政府軍に攻撃され壊滅的打撃を被り，国共合作を事実上崩壊させた皖南事変前夜であったことからもうかがわれ（p.261），三民主義青年団の創設と，歴史系教授姚縦吾を責任者とするその聯大支部の設置に対抗する中で，共産党は影響力を拡大していった（pp.263-265）。こうした国共両党の学生掌握の試みは多方面におよんだが，たとえば『阿Q正伝』の上演に国民党省支部講堂を使用したことについては，その使用許可を国民党の寛容さによるものとするにせよ，共産党の政治活動の巧みさによるものとするにせよ，二様の評価が現在の海峡両岸でなされている（p.269）。また，この時期は日本軍の軍事攻勢が継続し，昆明爆撃もその頻度を増したため，教育部は聯大の再移転を指示し，聯大は昆明近郊の叙永で新入生全員を受け入れることでそれにしたがっている（pp.275-276）。

第14章は「忍耐の年月」と題され，1941～43年を扱う。1941年は，年初の皖南事変から年末の日米戦争の開始という，中国の抗戦の転換点となる事件があった年である。まず，皖南事変の衝撃が語られる（pp.295-298）。当初，政府側の報道があり，事件の背景も含めこちらが正確なものと受け取られていたが，数日後に共産党系の『新華日報』が来着することで状況は一変した。聯大内部の国共摩擦ともいうべき論争が起こったのである。その中で，哲学系の学生であった殷福生は，ドイツとソ連をひとつのグループとみなし，そのイデオロギー・党・国家の一体性を厳しく批判し，同時にフランスも民族魂（“National Soul”）が欠けていたと批判し，中国が生き残ろうとするならナショナリズムこそが答えであるとしつつ，同時に国民党の腐敗も批判していた（pp.297-298）。いっぽう，ほぼ同じころ宋美齢がペットの犬を連れて飛行機に乗るため，聯大の陳寅恪教授が重慶行きの予約を取り消された事件がおきると，全学的な反国民党感情が吹き出したが，国共両党側の組織とも，これで主導権を握ることはできなかった（pp.300-302）。ともあれ，この時期は国共合作の理想が色褪せ，デスペレイトな感情が聯大をおおっていた。そして，戦時インフレの進行は聯大の財政基盤と学生教職員の生活を脅かし，各種のアルバイトは当然にしても（p.329），1日の食事を2回にしたり，売血する学生も現れ（p.307），不衛生な寄宿舎や設備の不充分な教室の惨状はいうまでもなかったが，そこにはいる泥棒さえおり，一般の人々の生活が聯大内部以上に苦しくなっていたことをうかがわせる（p.310）。それでも，華僑学生は家族が非占領区にいる場合は支援が受けられたため，貴重なたばこも吸っていた（p.316）。こうした中で，ともに中国文学系教授であり作家・詩人としても著名な沈従文や聞一多らは活発な出版活動を行い，そこでは当時延安で活動していた何其芳の作品の紹介や，リルケやニーチェの翻訳，さらには「意識の流れ」（stream-of-conciousness）など先進的な文学理論の紹介まで行われていた（p.325）。陶希聖，老舎，林語堂，孔祥熙，ニーダムなどがこの時期聯大を訪れ，講義や講演を行い（pp.326-327），聯大の教員学生の努力により学問的世界は維持された（p.332）。

「試練の年月」と題された第15章は，1943～45年を扱う。1943年にはいり，昆明にシェンノート将軍のフライング＝タイガース航空隊の基地が建設され，アメリカの物資や出版物の直接入手が可能となり，

聯大が外部世界とのつながりを復活させるようになった（p.335）。また聯大学生の参戦志向も高まり，1944年春には4年生のうち健常者すべてを通訳のリストに載せることを聯大指導部が決定し，蔣介石も同年10月には学生の軍事動員を決定した。その結果，学生たちの一部が積極的に従軍したものの，前線で目にしたものは低い戦意と賄賂や横領の横行する軍隊であり，学生の従軍を激励した聞一多らは後悔の念にとらわれたという（pp.340-342）。しかし，それは学生たちだけでなく聞一多自身が目撃していた「兵隊狩り」とでもいうべき国民政府軍の頽廃状況（pp.335-336）からすれば，自明のことであったのではないだろうか。いっぽう，学生の政治活動は皖南事変以降沈静化していたが，1944年の五四記念集会では，学生や歴史系教授呉晗ら共産党シンパにくわえ，地下党員を中心にした共産党側の活動が急速に活発化し，さらにそれに同調する民主同盟を中心としたリベラル派の教員の活動もあり，国共間の対立が激化していった（pp.345-347）。また，同年夏にアメリカ副大統領ウォーレス代表団が聯大を訪れ，聯大指導部との会見で国共両党をともに批判する発言がなされるなど（pp.347-348），聯大側のこうした状況の変化に対する苦悩が見て取れる。その後も，国共両党それぞれを擁護する言論が展開されるが，ともかく言論の自由は保証されていたが，それは雲南省主席龍雲が重慶との矛盾で優位に立つべく聯大の教員たちに接近した結果でもあり，つかの間の雲の切れ間に咲いた自由であった（p.352など）。

第16章は，日本の無条件降伏後，聯大を構成していた各大学が，歴史系教授鄭天挺を代表とする北京大学・清華大学・南開大学の各代表の指揮のもと，以前の校地に復帰する状況が「委任統治の完了」と題して述べられる。日本の敗戦によって速やかな帰還が期待されたものの（p.366），ことは簡単には運ばなかった。いざ，帰還となると，全国規模での教育政策を考える国民政府にとって，聯大は奇貨とすべきであり，現在もなお解決したとはいえない沿岸と内陸との多方面にわたる格差解消のためにも，良質の高等教育機関を残したいことはやまやまであったからである。結局，師範学院が昆明師範学院として残ることになった（p.376）。最終的に帰還が完了するのは1947年7月となるが，その間に「一二一運動」のような共産党が後押しをするリベラル派の反政府運動（pp.369-375），リベラル派の代表である李公僕や聯大精神の具現者とイズラエルが評価した聞一多の暗殺（pp.378-379）があり，国共内戦の進展とともに聯大のリベラリズムは消滅していったのである。特に，聞一多の暗殺は聯大の悲劇的エピローグでもあった（p.380）。

結論ではまず，20世紀前半の中国における高等教育にとって，北京政府時期においては結果的に学問的自由の成長を阻止するには政府そのものが幸いにも弱体すぎた（p.381），との皮肉なもの言いから始まる。そして，聯大で謳歌された，自立し主体性を持った個による個人主義がリベラリズムを支えたものの，それは1949年以降，共産党によってその土台ごと除去されたことを指摘する（p.383）。そうした近代中国のリベラリズムが成立し得た条件とは，制度的に法的に保証されたものではなく，抗争しあう権力の狭間の存在であり，国家の統一と強化を願うリベラル派知識人の願望は，達成されたとたんにかれら自身の存立基盤を失うものであった。しかし，これは国民党という選択肢を否定し去るものではなく，国民党がナショナリズムの結集軸として腐敗せぬ限りにおいては，聯大の学生教員ともども重慶政府を支持していたのである（p.385）。また，伝統知識人と大衆との階層的階級的乖離は聯大においても存在した。戦時の困窮に関しても知識人，すなわち伝統中国であれば士大夫に属するかれらにとっては，国家的な問題による一時的な犠牲であるがゆえに堪え忍ぶべきものであっても，一般の人々にとっては恒久的で無益な犠牲でしかなかったのである。そうした一般大衆の思考方法や生活に接近した知識人たちは，共産党による革命を支持するようになったのである（pp.386-387）。現在，中国共産党は聯大精神は党の指導によって鍛え上げられたものであり，その代表である聞一多もアメリカで研究活動をしていたブルジョア知識人が，プロレタリア知識人に成長した例であって，共産党の路線に感謝することで祖国に大いなる寄与をした，と評価している（p.

389)。そうした評価に対してイズラエルが批判的であることはいうまでもない。1989年の民主化運動などを引き合いに出しながら（p.379),「いつの日か，梅貽琦とその仲間は，アーサー王とその騎士たちになぞらえられよう。いまでさえ，ギャラハドのような聞一多の信念は確固たるものになりつつあるのである。……人民共和国はもちろん，台湾，ヨーロッパそしてアメリカにおいても，幾千の同窓生による証言と行動が聯大の今なお生きている精神を証している」(p.390) と述べている。

III

イズラエルは，聯大の全史を全体史として俯瞰することで，抗日民族統一戦線初期のナショナリズムのひとつの担い手であった知識人たちの行動を跡づけるだけでなく，その中で戦後中国において，とりわけ人民共和国成立以後の政治的激動の渦中において，人民共和国にかけた期待をことごとく裏切られ，権力によって翻弄されていった知識人たちの運命の予兆を見定めることに成功している。それが，本書のサブタイトルにしめされた「戦争と革命における中国の大学」の意味なのである。

著者のイズラエルは1935年12月の「一二九運動」を扱った名著［Israel 1966］で，抗日ナショナリズムの形成過程における学生を中心とした知識人の役割を論じた。本書では，それをひきついで日中戦争期における中国リベラリズムの可能性を追究したといえるのではないだろうか。リベラル派の羅隆基らは，国民党の腐敗を目の当たりにし，救国ナショナリズムのゆえに共産党よりの姿勢をとった。かれらは自立した個によって立つ真の個人主義者であり，それゆえなによりリベラリストであった。共産党にとって，日中戦争期から国共内戦期にかけて圧倒的多数を占める農民の支持を獲得したことが，人民共和国を樹立し得た最大の原因ではあるが，与論の動向という点から考えれば，2000年３月の台湾総統選挙において中央研究院院長李遠哲の支持表明が陳水扁陣営にとって決定的であったことを見ても明らかなように，知識人の支持が不可欠であることはいうまでもない。当時の中国において，最も良質な知識人を大量に擁していたところが聯大であり，したがってそこでの与論はまた決定的な意味を持つ。共産党が聯大での与論を獲得したことは，戦後の政治動向においてまた決定的な意味を持ったのである。しかしながら，共産党が与論を獲得するために多大な手助けとなった人々は，羅隆基をはじめとしてそのほとんどが成立後の人民共和国において，反右派闘争以後ブルジョア知識人として徹底的に批判され尽くした。故人である聞一多に到っては，本人の知らぬ間にプロレタリア知識人に成長してしまったのである。

それでは，リベラリズムの成立する条件が，日中戦争当時の中国にはたして整っていたのだろうか。イズラエルの整理した雲南省主席龍雲と重慶との矛盾の指摘から考えれば，中国リベラリズムとは権力の谷間に咲いた百合なのかもしれない。しかし，そうだとするとこの時代においては，歴史的例外状況の中でしかリベラリズムは成立し得ないことになる。『中国の赤色政権はなぜ存在できるか』で毛沢東が指摘した，省境地区の根拠地が権力の間隙の存在ゆえに存在できるという議論を彷彿とさせるものではある。本書の最も重要な論点であると思われるが，あらゆる独裁に生理的に反発する聯大のエートス，すなわちリベラリズムが現在もなお世界各地で，当然人民共和国においても脈打っているからこそ1989年の民主化運動にそれが引き継がれた，とイズラエルは主張する。このリベラリズムの持つ普遍的価値に関しては，同意するに吝かではない。しかし，聯大のエートスが成立し，一定期間ではあれ存在し得た理由については，充分に整理されているとは言い難い。歴史の展開が特殊的例外的状況と普遍性の織りなすものであることは当然であり，聯大のエートスは日中戦争という特殊の歴史的状況の中で，学問的自由というリベラリズムの普遍性を追求した結果である。聯大のエートスが，特殊な時代性にのみ依拠したものではないことはあきらかであるが，その普遍的価値が必ずしも当時もあるいは現在も中国において認められているとは言い難い。評者としても結論を持っているわけではないが，危機の時代ゆえ

生まれた聯大とそのエートスの意義を認めるとともに，それを政治的に利用する勢力と，政治的にうぶな知識人という図式がかいま見えてくる。

Ⅳ

本書以前に，楠原（1997）がすでに出版されている。そこで楠原はイズラエルが本書の先行作業として執筆した論文［Israel 1977］をあげている。なお，楠原は本論文が収録されている同書の出版社を落としたようであるが，イズラエル自身が本書で“Hicksvill, N.Y.: Exposition Press, 1977”と記している。また，本評を執筆中に，張寄謙（1999）を入手した。これは，イズラエルが扱った聯大全史の中の「長征」の中の，聞一多ら陸路を走破したした人々を取り上げたもので，多数の写真と関連史料のほかに，楠原が参照したイズラエルの先行研究に関しては華訳のうえ抄録されているが，出典は記されていない。なお若干本論から離れるが，聯大の「長征」に際して，昆明では中央研究院歴史語言研究所所長傅斯年を中心にさきに移転していた中央研究院関係者が出迎えているが，張氏はこれについて述べるところ少なく，傅斯年の名も出てこない。傅斯年が国民党とともに台湾にわたり，台湾大学の立ち上げに尽力したことと，かれがベルリン大学で体得し，帰国後中国において提唱したランケ史学に基づく歴史研究を，現在の人民共和国でブルジョア実証史学として批判していることがその理由の中心であろうが，中央研究院歴史語言研究所での役割も含め，人民共和国でのイデオロギッシュかつ不当な扱いとなっているのであろう。ちなみに，『中国大百科全書』には「傅斯年」の項目すらない。

楠原も「長征」の展開過程に力点を置き，ナショナリズムの高揚に聯大の教員学生が果たした役割に関心を払っている。楠原は著書の最後に人民共和国成立後の聯大知識人の運命に若干触れ，視野の大きさをうかがわせている。いっぽう，ないものねだりではあるかもしれないが，張にはそうした視点はない。こうした点から見ても，イズラエルの本書では，まず「長征」の過程についても充実した筆の運びを見せ，さらに，その後の聯大の歴史に関しても数多くのエピソードを紹介しつつ，単なるエピソードの集積には終わらず，それらを全体史として位置づけ，日中戦争期における中国知識人の姿とその運命を，聯大という歴史的舞台の上に浮き彫りにしている。聯大が知識人の抗日ナショナリズムの昂揚の中で成立したことを指摘しつつ，聯大を「民主主義の堡塁」とだけとは簡単には言い切れない，各勢力の絡み合いの存在が描かれている。西村成雄ががその著［西村 1991］で扱った近代後期中国政治思想の2つの潮流が，聯大にも大きなうねりとして及び，人々を巻き込んでいったのである。

聯大のエートスであるリベラリズムの担い手とその志向とを検討した本書は，聯大の歴史の中にすでに戦後中国の帰趨を見取ることができる上でも，貴重な研究と言えるのではないだろうか。

文献リスト

＜日本語文献＞

楠原俊代　1997.　『日中戦争期における中国知識人研究――もう一つの長征・国立西南聯合大学への道――』研文出版.

黄仁宇　1994.　『中国マクロヒストリー』（山本英史訳）東方書店.

西村成雄　1991.　『中国ナショナリズムと民主主義――20世紀中国政治史の新たな視界――』研文出版.

＜外国語文献＞

『中国大百科全書』　1980～1994.　中国大百科全書出版社.

張寄謙編　1999.　『中国教育史上的一次創挙――西南聯合大学湘黔滇旅行団記実――』北京　北京大学出版社.

Israel 1966. *Student Nationalism in China, 1927-1937*. Stanford University Press.

――1977. “Southwest Associated University: Preservation as an Ultimate Value.” In *National China during the Sino-Japanese War, 1937-1945*, ed. Paul K. T. Sih. New York.

（愛知大学現代中国学部助教授）